Japanese Association for Religious Studies

哲学の舞台はやがて欧州全土に拡大される。ドイツ、ケーニッヒスベルク大学神学部のI・カントは、プラトン等が、純粋思惟（idea）により普遍妥当な概念的実在に至ると主張したのに対し、直感的理性（主観的理念の能力）により、客観世界の理解・認識を可能とする（理性・判断・実践）批判説を提唱した。キリスト教の神学世界を脱し、新たな人間観を確立しようとする動きであった。このカント門を叩いたJ・ヘルダーは、カントと彼の元にいたH・ハマンの教えに従い、民謡採集に騎行し、さらに海路北欧から南欧・イタリーへの大旅行をするに及び、言語学・歴史学の大著を著し、地理学・民族学・民俗学・宗教学への道を開く。疾風怒濤時代への突入である。(2)

これより三〇〇年も早く、スペイン女王の援助を得、パロスを出港したコロンブスは、大航海時代への幕開けをした。陸の文化科学的動向と相俟ち、ゴッド世界への科学的侵入であった。浦賀へ回航したペリーの艦隊は、新市場を中国に求め、日本を橋頭堡にするアメリカの国策であったが、大局的には、神学に発した哲学的発想といえよう。

有無を云わさぬ開港要求に屈した日本は、代償として科学文明の所産を手に入れる。ペリー来航から半世紀、日本は日清・日露の戦争に大勝し、世界を驚かせたが、和魂洋才と自惚れた国民は、科学製品に好みの手を入れ、からくり手法の改良を試みたが、所詮模倣の域を出なかった。全国の神社では、平安衣装で擬古文の祝詞を読み、社頭では神籤・御札・御守りを頒布していた。大東亜戦争は、欧米植民地主義に抗する、国民の熱烈な支持を得て開戦。地球上から植民地を一掃した。しかし戦闘には敗れ、大都市は焦土と化した。国力の差、模倣科学の欠点。脱落した哲学の所産とは、未だに気付いていない。

注

(1) ロベール・フラスリエール（戸張智雄訳）『ギリシアの神託』東京、白水社、一九六三年、二〇頁以下。

(2) 平野孝國「ヘルダーにおける『自然』『人間』『神』」『宗教研究』一八二号、一九六五年、五三―八五頁。同「民族学の先駆者Johann Gottfried Herder（1744-1803）」『民族學研究』第三〇巻第二号、一九六五年、一五〇―一六〇頁。

「霊場」における死者供養の具体相

――秩父観音霊場を事例として――

徳野崇行

これまでの死者への弔いに対する研究では、死に伴う葬送習俗や墓、先祖観、その担い手となる祭祀集団が主要な論点となっており、対して仏教諸宗派の僧侶が営む葬儀後の追善供養に関する歴史的変遷、法要、儀礼の現状に関する研究は少ない傾向がある。こうした状況を鑑み、日本仏教における追善供養の具体相を秩父観音霊場の一番札所である四萬部寺での「大施食会」という儀礼を通して考察するのが本稿の目的である。四萬部寺を事例とするのは、筆者が日本仏教における死者供養を①菩提寺、②霊場寺院、③本山寺院、④行者仏教という四つの位

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

相を想定して研究を進めているためである。これらの四つの位相は死者供養という観点から寺院・組織を分類したもので、①の供養は家制度を前提にしているのに対し、②③④という位相での供養には、家制度を前提としないものも多い。そこで筆者は供養の申込みが記された「勧募帳」を閲覧できた四萬部寺を事例とし、この帳簿から、供養を申し込んだ依頼者の地域分布や男女比、並びに依頼者（施主）と供養対象との関係を統計的に把握し、霊場寺院と菩提寺の供養を比較考察する。

四萬部寺は埼玉県秩父市大字栃谷に位置し、秩父三十四観音霊場の一番札所の古刹として知られ、毎年八月二四日に営まれる施食会は「関東三大施餓鬼」の一つとされ、関東一円より参拝者が訪れる。勧募帳の記載を集計すると、二〇〇八年の施食会で供養を申し込んだ施主の総数は一〇〇〇人（男性七〇七人、女性二八九人、家・法人四）であった。記載された名称から供養対象を見ると、家名を記さず「先祖代々精霊」を供養するもの、同姓の家名で先祖を供養するものが多くを占める一方、他姓の家の先祖供養や水子、動物といった多様な供養が申し込まれていた。戒名による供養には釈号・日号といった他宗派のもの、「〇〇比古命之精霊」といった神道的な諡名による供養すら含まれていた。

供養内容における男女差を見ると、水子に対する供養が女性は男性に比べ一九・六％と高い結果となっていた。並びに他姓の家の先祖供養の割合が男性の二・六％に比べ、女性が八・〇％と若干高く、これらの多くは結婚した女性が実家の先祖を供養するものと考えられる。二〇〇八年に行った面接調査では、婚家の先祖は菩提寺で供養し、実家の先祖を四萬部寺で供養する女性、菩提寺の供養の対象でもある前妻と後妻を四萬部寺で重ねて供養することで、より懇ろに弔おうとする男性が確認された。

四萬部寺において、このような多様性を帯びた供養が可能なのは、菩提寺での供養が家制度に基づた死者を回忌といった特定の時期に供養を営むことが予め決められているのに対し、霊場寺院での供養は施主の願いによって、その対象を選択できるためと考えられる。施主の願いに応じて、申し込まれた供養を拒否せずに営むこの霊場寺院の柔軟性は、結婚によって家を出た人物の実家の肉親、あるいは嫁いだ子供といった家制度を超えた対象への供養を自ら主体的に営む道を開放するのである。このような柔軟性から霊場寺院での供は、婚家と実家の両方の先祖を供養する父系・母系の双系的な性格を帯びやすく、あるいは菩提寺では婚家の先祖を、霊場では実家の先祖を供養するといった寺院の使い分けすら見られるのである。並びに、菩提寺、霊場での追善供養を鳥瞰的に見たとき、死者たちがこの二つの寺院で重層的に供養されている。霊場で供養される死者たちのほとんどは、菩提寺での葬儀、墓地への埋葬を終え、法事によって供養されている死者たちである。つまり日本仏教において死者供養は、先に示した①菩提寺に加えて、②霊場寺院、③本山寺院、④行者仏教という位相によって重層的に営まれる可能性を秘めているのである。

NII-Electronic Library Service